

ほっかいどう
歴史・文化・自然「体感」交流空間構想
(素案)

つたえあう、つながりあう。私たちの北海道ストーリー。



平成 30 年 月

北海道環境生活部

もくじ

はじめに	2
このエリアがめざす姿	3
北海道博物館	4
〔50年後のめざす姿・今後の方向性・具体的な取組〕	
北海道開拓の村	6
〔50年後のめざす姿・今後の方向性・具体的な取組〕	
北海道百年記念塔・塔前広場	8
〔50年後のめざす姿・今後の方向性・具体的な取組〕	
野幌森林公園	10
〔50年後のめざす姿・今後の方向性・具体的な取組〕	
近隣施設との連携	11
〔50年後のめざす姿・今後の方向性・具体的な取組〕	
50年後の道民に引き継ぐ思い	12
エリア再生に向けた「具体的な取組」の進め方	13
資料編	16
イメージ図	17
構想策定経過	21
施設の概要	32
用語解説	37

※ 本文中「○○○※」と表示された用語については、37 ページからの用語解説にて説明しています。

はじめに

今年（2018年）、この北の大地は、北海道と命名されてから150年目の節目の年を迎えました。

現在、北海道は欧州の一国にも匹敵する豊かな地域となりましたが、この発展は悠久の歴史を持つ北の大地が刻んできた幾多の先人の営みの上に成り立っています。

私たちの北海道には、世界遺産登録をめざす縄文遺跡群^{*}をはじめとする歴史的な文化や、先住民族であるアイヌの人たちによって培われてきた文化が存在します。さらに、全国各地からの移住者の生活や明治期における諸外国の影響を受け継ぎ、開放的で多様性のある文化が育まれてきました。

昭和40年代の北海道百年記念事業の一環として公園指定された道立自然公園野幌森林公園に所在する北海道博物館、北海道開拓の村、北海道百年記念塔は、本道が積み重ねてきた歴史・文化や先人の偉業、そして自然に触れることができる場として、これまでの長きにわたって道民の皆様にご親しまれ、多くの方々に利用されてきました。しかし、開設から約50年が経過したこともあり、施設の老朽化や利用者数の減少など様々な課題が生じています。

北海道命名150年の今年、道では、道民の貴重な財産であるこれらの施設を次の世代にどのような形で引き継いでいくのが相応しいかについて、これまで様々な機会を通じて道民の皆様や専門家の方々から幅広くご意見をいただきました。

このたび、こうしたご意見も踏まえて、これらの施設に自然豊かな周辺地域を含めたエリア全体を、歴史、文化、自然を体感し交流できる空間として再生し、次世代に伝えていくための構想をとりまとめました。

道では、今後、この構想の実現に向けて着手可能なものから順次取り組んでまいります。道民の皆様のご理解とご協力をお願い申し上げます。

このエリアがめざす姿

大都市近郊に残された野幌森林公園の豊かな自然環境をフィールドに、北海道博物館や北海道開拓の村が伝える「歴史・文化・自然」等の各施設が持つ強みを活かし、隣接する他の施設や教育機関等と一体となって、「学ぶ」、「触れる」、「集う」、「繋がる」をキーワードに、異なる世代、様々な国や民族、障がいの有無などに関わらず、訪れる利用者のすべてが、北海道の歴史や文化、自然を五感で「体感」し、交流できる賑わいのある持続可能な空間をめざします。

【キーワード】
学ぶ、触れる、集う、繋がる



北海道博物館

<50年後のめざす姿>

北海道の歴史、文化、自然を総合的に学ぶことのできる博物館として、子どもから大人まで多くの人々が繰り返し訪れています。

また、本道固有の歴史や道内各地の様々な文化を発掘・再発見し、発信・継承する「北海道ミュージアム構想※」

の中核的博物館※として地域の博物館等とのネットワークを構築し、道内各地での学びや地域の活性化をサポートしています。

さらに、博物館から発信した情報が国内外の人々の北海道の歴史・文化・自然への関心を高め、本道の観光客増加に寄与しています。

<今後の方向性>

北海道博物館の設置に当たり策定した「北海道博物館基本計画（以下「基本計画」という。）」における3つの基本理念のもと、今後、次の2つの点にも重点をおいて進めていきます。

- ◎ 本道の中核的博物館、道民参画型博物館※として、更なる魅力向上に努めます。
- ◎ 2020年に開設される国立アイヌ民族博物館※等との役割分担を考慮に入れながら幅広い連携を図ります。

<具体的な取組>

基本計画を踏まえ策定した「基本的運営方針」に基づき、博物館運営に係る中期目標・計画※を定め具体的な取組を引き続き進めるとともに、北海道立総合博物館協議会※による事業評価などにより、その運営が適切に行われているか検証し、改善に努めていきます。

○ 次期中期目標・計画の策定及び推進

現在、取組を進めている事業もありますが、2020年度からの5カ年間の中



期目標・計画について、＜今後の方向性＞や専門家並びに道民の皆様からいただいたご意見を踏まえ、主に次の事項について検討し、目標を定めた上で、着実に取組を進めます。

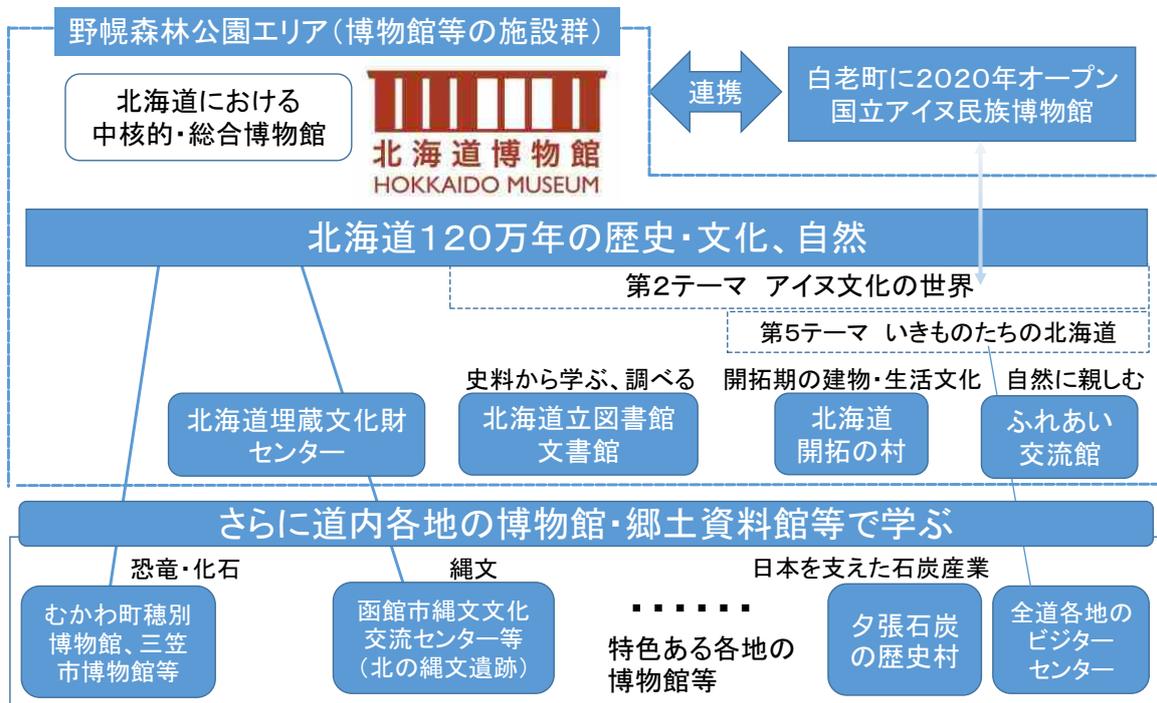
- ・北海道の中核的博物館としての機能の充実や道内博物館などとの連携のさらなる強化
- ・博物館参加組織（ミュージアムパートナー(仮称)）等の導入
- ・民間企業等と連携した企画展の取組
- ・生涯学習や学校教育への支援の充実
- ・スマートフォンアプリの活用など ICT を活用した情報提供と地域住民等とのさらなる連携
- ・外部資金の導入・活用の検討
- ・出前講座の実施など地域とのネットワーク構築
- ・利用者ニーズや客観性を踏まえた展示の入れ替えの検討やイベントの充実によるリピーターの確保
- ・こどもからおとなまで楽しみながら学べる体験学習の場である「はっけん広場^{*}」の運営と活動の充実
- ・広報機能など情報発信力の強化による認知度の向上
- ・博物館実習生やインターンシップ等の人材育成
- ・交流人事など組織の活性化の検討
- ・北海道博物館と開拓の村、野幌森林公園（野幌森林公園自然ふれあい交流館^{*}を含む）の回遊性を高める取組
- ・国立アイヌ民族博物館との共同研究等の実施
- ・アイヌ文化に関する調査研究等の機能の充実

○ 指定管理者制度^{*}の見直し

- ・全庁的な指定管理者制度見直しへの対応検討（指定管理期間、修繕費の負担のあり方等）
- ・指定管理者が行う自主企画事業の範囲を整理



北海道全体がミュージアム



北海道開拓の村

<50年後のめざす姿>

北海道立総合博物館の本館である北海道博物館と一体となって、主に開拓期の歴史を体験的に学び、未来への発展の心を養う場としての役割を引き続き果たしています。

いつ来ても、懐かしさを感じさせる北海道らしいイベントが開催されており、道民の皆様のみならず多くの訪日外国人に人気の場所となっています。

また、世界的にも稀少である、積雪寒冷地における歴史的建造物の保存・展示施設として、「活用しながらの保存」に向けた様々な取組を実践しています。

<今後の方向性>

◎ 博物館としての役割を基本としながら、国内外からの旅行者をターゲット



北海道開拓の村 旧札幌停車場

にした観光拠点、古民家再生^{*}等人材育成拠点としての活用を図ります。

<具体的な取組>

野外博物館としての基本的機能の充実とともに、観光拠点や人材育成拠点として活用するための方策について、専門家並びに道民の皆様からいただいたご意見を踏まえながら、有識者等による協議を行い、開拓の村の今後のあり方について取りまとめます。

○ 開拓の村の展示建造物の保存、活用に関する有識者会議による検討

現在、取組を進めている事業もありますが、専門家並びに道民の皆様からいただいたご意見を踏まえ、主に次の事項について検討し、実施可能なものから順次、取り組みを進めます。

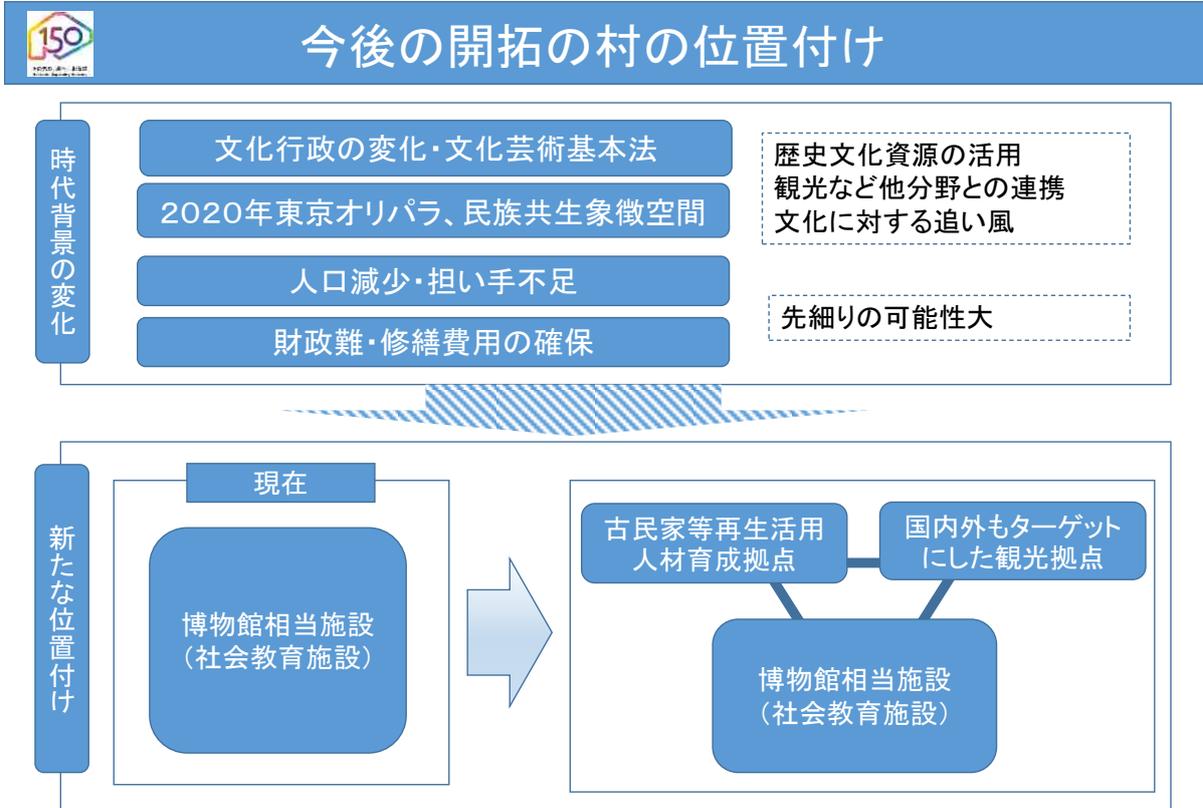
- ・「道有建築物等における修繕の新たな仕組み」（修繕業務の集約化）を踏まえた今後の維持修繕活用方針の策定
- ・代替素材の活用（修繕費の節約、耐久性の向上等）の検討
- ・民間の資金や活力の導入の検討（PPP^{*}、PFI^{*}、指定寄附^{*}、クラウドファンディング^{*}、オーナー制度^{*}、ネーミングライツ^{*}等）
- ・各自治体教育委員会等との連携による道内児童、生徒の利用拡大（修学旅行、社会科見学の誘致）
- ・障がい者に配慮した展示方法等の検討
- ・宿泊や着付け等の体験型プログラムの充実
- ・民間企業と連携した発信力強化の検討（マラソン大会やコスプレイベントの実施、古民家風カフェの導入、オリジナルグッズの開発・販売、夜間営業、ライトアップ、無料の日の設定等）
- ・民間企業等が行うヘリテージマネージャー^{*}研修や NPO 団体等との連携による展示建造物の保存活用
- ・修繕業務における道内技術者、道産材の積極的活用（修繕業務の「地産地再^{*}」）

○ 指定管理者制度の見直し

- ・全庁的な指定管理者制度見直しへの対応検討（指定管理期間、修繕費の負

担のあり方等)

- ・ 指定管理者が行う自主企画事業の範囲を整理



北海道百年記念塔・塔前広場

<50年後のめざす姿>

この広場は、道民のみならず、国内外からも数多くの方々が訪れ、家族や仲間と楽しむ交流空間となっています。

広場の中心にあるモニュメントは、はるか太古から綿々と続く北海道の歴史と今日の北海道を築き上げた幾多の先人の思いを引き継ぐとともに、お互いに多様性を認め合う共生の立場で、未来志向に立った将来の北海道を象徴する役割を担っています。



周辺広場は、利用者が犬を引き連れるなど自由に散策することが可能な一方で、友人や仲間たちとバーベキューやボール遊びを楽しむなど、周囲の自然豊かな森林を背景に、安全で心安らぐ憩いの場としての役割も果たしています。

＜今後の方向性＞

- ◎ 百年記念塔は、先人に対する感謝と躍進北海道のシンボルとして、また道民の貴重な財産として長く親しまれてきましたが、老朽化に伴う利用者への安全確保や将来世代への負担軽減等の観点から、解体もやむを得ないと判断し、その跡地には、新たなモニュメントを設置することとします（発展的継承）。
- ◎ 百年記念塔に替わる新たなモニュメントは、はるか太古から綿々と続く北海道の歴史・文化と、今日の北海道を築き上げてきた幾多の先人の思いを引き継ぐとともに、お互いの多様性を認め合う共生の立場で、未来志向に立った将来の北海道を象徴する役割を担うものとします。
- ◎ 新たなモニュメントは、記念塔にある佐藤忠良氏のレリーフや解体材の有効活用を検討するほか、今後の維持経費にも配慮します。
- ◎ 周辺広場は、自由に散策できるなど広く開放された交流空間とするため、利用規制の緩和に向けて、利用者や有識者の意見を聞くなど検討を行うとともに、安心して利用するため施設の安全性向上に努めます。

＜具体的な取組＞

○ 新たなモニュメントを中心とする賑わいのある広場の整備を推進

- ・ 百年記念塔を解体するための実施設計、解体工事の実施
- ・ 百年記念塔に関する思い出や記憶をとりまとめ、保存するための取組等の実施
- ・ 新たなモニュメントの設置
- ・ 利用規制の緩和に向けた検討（利用者の意向確認、有識者の意見聴取等）
- ・ 施設の適正管理による安全性の向上

野幌森林公園

<50年後のめざす姿>

都市近郊に残された世界有数の平地林が原始の面影を残しつつ、適切に保全され、野外の自然に親しむ場として、夏は森林浴、冬は歩くスキーなど、あらゆる方々が安心して公園を利用しています。

<今後の方向性>

- ◎ 大都市近郊の貴重な平地林として適切に保全するとともに、森林の保全と活用を図ります。
- ◎ 遊歩道のバリアフリー化や老朽施設の適切な維持管理、案内板の多言語化等、あらゆる方々が安心して公園を利用できる環境づくりを進めます。

<具体的な取組>

野幌森林公園の貴重な自然を保全するため、様々な取組を進める一方で、多くの人々が親しむことができる公園とするための活動の充実等を図ります。

○ 貴重な自然の保全及び公園利用促進の取組

- ・ 関係機関と連携し、生態系の保全、不法投棄対策、公園利用者のマナー向上に関する啓発に取り組むなど、森林の保全活動を推進
- ・ 多くの利用者が自然に親しむ機会が持てるよう、関係機関が連携して自然観察会などの活動を充実
- ・ 障がいのある方や訪日外国人など、あらゆる方々が安心して公園を利用できるよう、遊歩道の一部のバリアフリー化や多言語による案内看板の整備などユニバーサルデザイン化の検討
- ・ 施設の適正管理による安全性の向上
- ・ 道民の皆様に親しまれ、覚えられやすいエリア全体を表す愛称の募集と普及の検討

○ 指定管理者制度の見直し

- ・ 全庁的な指定管理者制度見直しへの対応検討（指定管理期間、修繕費の負担のあり方等）
- ・ 指定管理者が行う自主企画事業の範囲を整理

近隣施設との連携

<50年後のめざす姿>

近隣の埋蔵文化財センター*、野幌総合運動公園*、北海道立図書館*、同文書館*などの歴史、文化・スポーツ施設と連携したイベント等が実施されており、交流空間としてエリア全体を人々が行き来し各施設に賑わいが広がっています。

<今後の方向性>

◎ 埋蔵文化財センター、野幌総合運動公園、図書館などの文化・スポーツ施設等と連携を図ることにより、より魅力的な交流空間として再生を図ります。

<具体的な取組>

○ 密接な連携を図るため、イベントの開催や情報の一元化など、様々な取組を推進

- ・各施設と連携したイベントの開催の検討
- ・各施設と連携を図るための遊歩道の環境整備を検討
- ・各施設情報を一元化したパンフレットやホームページ等による情報発信
- ・道立図書館・文書館等との図書・資料情報の共有を通じた利用の円滑化を検討
- ・施設相互利用のモデルプランの検討
- ・世界遺産登録を見据え、埋蔵文化財センターへの経路沿いに住民参加による屋外縄文施設の整備を検討
- ・民間バス会社等との連携による交通アクセスの改善
- ・レンタサイクルの導入に向けた民間事業者との協議

つたえあう、つながりあう。
私たちの北海道ストーリー。

多くの人たちの労苦と知恵とチャレンジ精神によって築かれてきた北海道。先人に学び、感謝しながら、私たちは北海道への想いを次代へとバトンタッチしていきます。世界のどこにも例のない、北の大地の歴史と文化と自然。その素晴らしい価値を、広く、深く伝えながらさらに創造していきます。



空から見た野幌森林公園

起草 北海道の歴史文化施設活性化に関する懇談会 座長 臼井栄三

エリア再生に向けた「具体的な取組」の進め方

- 道では、構想の実現に向け、本文中に記載した「具体的な取組」に関する事業を、実施可能なものから順次取り組めます。
 - 取組は、北海道博物館の「第2期中期目標・計画」（2019年度策定予定）や（仮称）「北海道開拓の村維持修繕活用方針」（同）に基づき、計画的に推進します。
- ※ 開始年度（予定）

 - ・ 現在、既に取り組を進めている事業については、「継続」と記載していますが、構想の趣旨や新たに定める北海道博物館の「第2期中期目標・計画」及び北海道開拓の村の「維持修繕活用方針」の内容を踏まえ、適宜、事業の見直しを行います。
 - ・ 構想の策定に基づき、新たに取り組む必要のある事業については、開始予定年度を記載しています。

施設名	具体的な取組	開始年度 (予定)	備考
北海道博物館	第2期中期目標・計画の策定及び推進		
	第2期中期目標・計画の策定	2019	
	第2期中期目標・計画の推進	2020	計画期間 5カ年
	魅力向上に関する取り組み		
	中核的博物館としての機能充実、道内博物館等との連携強化	継続	
	博物館参加組織等の導入	継続	
	民間企業等と連携した企画展の取組	継続	
	生涯学習や学校教育への支援の充実	継続	
	I C Tを活用した情報提供と地域住民等との連携	継続	
	外部資金の導入・活用の検討	継続	
	出前講座の実施など地域とのネットワーク構築	継続	
	利用者ニーズ等を踏まえた展示の入れ替えの検討やリピーターの確保	継続	
	「はっけん広場」の運営と活動の充実	継続	
	情報発信力の強化による認知度の向上	継続	
	博物館実習生等の人材育成	継続	
	交流人事など組織の活性化の検討	2019	
	博物館等の回遊性を高める取組	継続	
	国立アイヌ民族博物館等との連携		
	国立アイヌ民族博物館との共同研究等の実施	検討	国立アイヌ民族博物館の開設状況を踏まえ開始時期を検討
	アイヌ文化に関する調査研究等の機能の充実	検討	
指定管理者制度の見直し			
指定管理者制度見直しへの対応検討	2019		
自主企画事業の範囲を整理	～		
北海道開拓の村	博物館としての役割を基本とた、観光拠点、古民家再生等人材育成拠点としての活用		
	展示建造等の維持修繕活用方針の策定	2019	

	代替素材活用の検討	検討	維持活用方針の内容を踏まえ開始時期を検討
	民間の資金や活力の導入の検討	検討	〃
	道内児童、生徒の利用拡大に向けた取組	継続	
	障がい者に配慮した展示方法等の検討	継続	
	宿泊や着付け等の体験型プログラムの充実	継続	
	民間企業と連携した発信力の強化	検討	維持活用方針の内容を踏まえ開始時期を検討
	ヘリテージマネージャー研修等との連携による展示建造物の保存活用	検討	〃
	修繕業務における道内技術者、道産材の積極的活用（修繕業務の「地産地再」）	検討	〃
	指定管理者制度の見直し		
	指定管理者制度見直しへの対応検討	2019	
	自主企画事業の範囲を整理	～	
北海道百年記念塔	公園利用者の安全対策、先人の思いを引き継ぐ取組		
	百年記念塔の解体	2019	
	百年記念塔に代わる新たなモニュメントの設置	～	
	百年記念塔に関する思い出や記録の整理	2021	
	利用規制の緩和に向けた検討	2019	
	施設の適正管理による安全性の向上	継続	
野幌森林公園	自然の保全及び公園利用促進の取組		
	関係機関と連携した森林の保全活動を推進	継続	
	自然観察会などの活動充実	継続	
	森林公園内施設のユニバーサルデザイン化の検討	継続	
	施設の適正管理による安全性の向上	継続	
	エリア全体を表す愛称の募集と普及の検討	2019	
	指定管理者制度の見直し		
	指定管理者制度見直しへの対応検討	2019	
	自主企画事業の範囲を整理	～	
近隣施設との連携	文化・スポーツ施設等との連携による魅力的な交流空間として再生するための取組		
	各施設と連携したイベントの開催の検討	2019	
	各施設と連携を図るための遊歩道の環境整備の検討	2019	
	施設情報一元化による情報発信	継続	
	図書・資料情報の共有による利用の円滑化の検討	2019	
	施設相互利用のモデルプランの検討	2019	
	住民参加による屋外縄文施設の整備を検討	2019	
	民間バス会社等との連携による交通アクセスの改善	継続	
	レンタサイクルの導入に向けた民間事業者との協議	2019	

資料編

イメージ図

【子どもから大人まで多くの人が繰り返し訪れる北海道博物館】



【国内外からの旅行者をターゲットにした観光拠点】

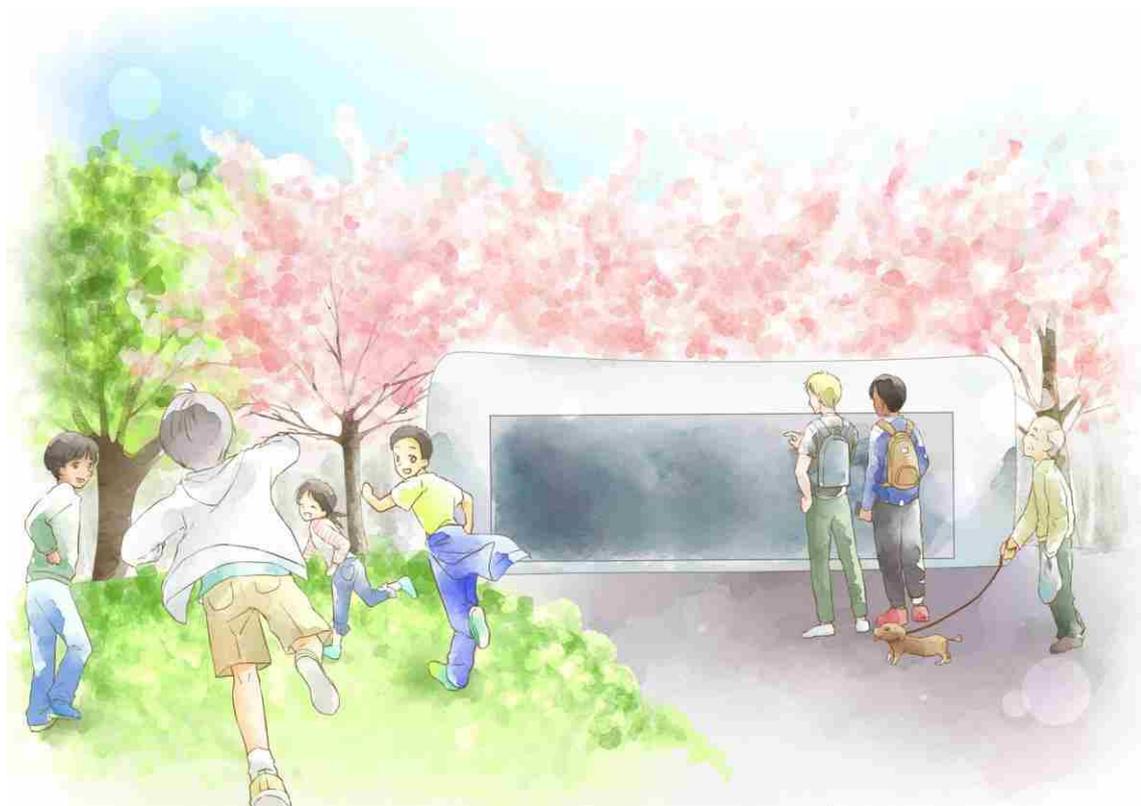


【

【古民家再生等人材育成拠点としての活用】



【幾多の先人の思い、多様性を認め合う共生の立場、未来志向に立った将来の北海道を象徴するモニュメントの例】



【国内外からも数多くの方々が訪れ、家族や仲間と楽しむ交流空間】



【野外の自然に親しむ場として、あらゆる方々が安心して公園を利用】



【近隣の文化・スポーツ施設等と連携を図り、魅力的な交流空間として再生】



illustration : あいば ゆう

【第2回北のまんが大賞 大賞受賞者】

構想策定経過

○ 北海道の歴史文化施設活性化に関する懇談会

1 目的

北海道百年記念施設として設置された北海道博物館及び百年記念塔は、昭和 46 年に、また、北海道開拓の村は昭和 58 年にそれぞれオープンし、これまで道内外の多くの人たちに利用され今日に至っている。

平成 30 年に北海道 150 年を迎えるにあたり、道民の貴重な財産である当該施設を将来に向けて、どのように後世に伝えていくことが相応しいのか、学識経験者等から幅広く意見を聴取するため、「北海道の歴史文化施設活性化に関する懇談会」を開催する。

2 議題

- (1) 百年記念施設の活性化と安定的な運営を図るための方策について
- (2) その他、百年記念施設の活性化と安定的な運営に関し、必要な事項

3 構成

氏 名	所属・職名
臼井 栄三	(国)北海道教育大学岩見沢校 特任教授
戎谷 侑男	(株)シーブーツアーズ 代表取締役社長
佐々木亮子	(有)アールズセミナー 代表取締役
中田美知子	(学)札幌大学 客員教授
西 吉樹	(一財)北海道歴史文化財団 業務執行理事法人本部長
西山 徳明	(国)北海道大学観光学高等研究センター センター長
山崎 幹根	(国)北海道大学大学院法学研究科・法学部 教授

4 開催状況

- 第 1 回 平成 28 年 10 月 28 日 (金) 道庁赤れんが庁舎
- 第 2 回 平成 28 年 11 月 26 日 (土) 北海道博物館 (現地調査含む)
- 第 3 回 平成 29 年 2 月 17 日 (金) 道庁赤れんが庁舎
- 第 4 回 平成 29 年 6 月 7 日 (水) 道庁赤れんが庁舎
- 第 5 回 平成 29 年 10 月 31 日 (火) 道庁別館

○ ほっかいどう歴史・文化・自然「体感」交流空間構想検討会議

1 目的

道立自然公園野幌森林公園に所在する百年記念施設（北海道博物館、北海道開拓の村、北海道百年記念塔）及びその周辺地域について、道は、北海道150年の節目である平成30年までに再生に向けた構想を策定することとしているが、これについて専門的に検討する。

2 所掌事項

- (1) 再生構想のとりまとめに関すること
- (2) その他、検討に当たり必要な事項

3 出席有識者

開催	氏名	所属・職
第1回	小磯 修二	(一社)地域研究工房 代表理事
第2回	西山 徳明	(国)北海道大学観光学高等研究センター センター長
	石井 吉春	(国)北海道大学公共政策大学院 特任教授
	本田 優子	札幌大学文学部 教授 (※書面により意見提出)
第3回	田沼 吉伸	北海道科学大学工学部 教授

4 開催状況

- 第1回 平成30年5月31日(木) かでの2・7 730会議室
第2回 平成30年7月13日(金) かでの2・7 510会議室
第3回 平成30年8月22日(水) かでの2・7 110会議室

5 北海道百年記念塔に対する主なご意見

- ・高度成長期の当時とは時代背景は大きく異なる。
- ・50年近い歴史を刻んできた貴重な文化資源として残すべき。
- ・インフラの大更新期が迫る。将来世代の負担で維持すべきものにはならない。
- ・解体した後、跡地には何もつukらない。
- ・老朽化が進んでおり、塔の安全性が懸念される。

○ 百年記念施設の継承と活用に関する道民ワークショップ

1 開催目的

百年記念施設を含む周辺地域を、今後の50年、100年先をも展望しながら、次の世代にどのように引き継いでいくのかについて、道民や地域の関係団体の皆様から幅広くご意見を伺う

2 テーマ

50年後を見据えた自然・歴史・文化「体感」交流空間としての再生

3 開催日時等

(1) 一般道民対象

第1回 平成30年5月19日(土) 14時～17時

場所：北海道博物館 参加者：40名

第2回 平成30年5月20日(日) 14時～17時

場所：北海道博物館 参加者：40名

(2) 北海学園大学(学芸員課程)

平成30年6月10日(日) 13時30分～16時

場所：北海道博物館 参加者：9名

※ 主な意見はP28に掲載

○ 専門家ヒアリング

本構想の検討にあたり、ヘリテージマネージャー、古民家再生、公園デザイン、資金調達、交通事業者、施設利用者や学識者など各界の専門家より、それぞれの立場から博物館等に対するご意見を伺いました。

1 ヒアリング実施先

(1) ご協力いただいた企業・団体等(順不同・敬称略)

株式会社ACTNOW

厚別区PTA連合会

株式会社アトリエ・モリヒコ

株式会社KITABA

株式会社キタバ・ランドスケープ
有限会社クンスト
NPO法人旧小熊邸倶楽部
ジェイ・アール北海道バス株式会社
障がい当事者講師の会すぷりんぐ
新日鉄住金株式会社
武部建設株式会社
伝統建築技能集団建築ヘリテージサロン
株式会社日本政策投資銀行北海道支店
株式会社北洋銀行
株式会社北海道銀行
一般社団法人北海道建築士会
株式会社北海道チャイナワーク
北海道文化審議会委員
認定NPO法人ポロクル
株式会社M a m m y P r o

(2) ご協力いただいた学識者（順不同・敬称略）

札幌市立大学デザイン学部	教授	羽深	久夫
北海道科学大学工学部	教授	田沼	吉伸
北海道大学	名誉教授	石山	祐二
北海道大学大学院工学研究科	教授	菊地	優
北海道大学大学院文学研究科	教授	佐々木	亨

2 主なご意見

【エリア全体に対するご意見】

- ・団体客が入れば SNS で発信され話題が広まるので、FIT（個人手配の海外旅行）は放っておいてもそこから波及する。
- ・期間限定でも札幌駅からのシャトルバスがあると良い。
- ・札幌周辺は、冬の観光コンテンツが少ないので重要な施設だと思うが、観光地としての認知度が低い。

【北海道博物館に対するご意見】

- ・ バリアフリーがしっかりしており、スタッフの気配りにも感心した。
- ・ 計画に掲げている目標は素晴らしいが、実現に時間がかかっている印象。
- ・ 住民参加型博物館として他県では経営に参画するところまでできている。
- ・ 多文化共生ということでアイヌ展示はよくやっているが、アイヌの方々の企画への参加もあれば。
- ・ 他県では、学芸員が行政職を経験するように人事交流をしている事例がある。

【北海道開拓の村に対するご意見】

- ・ 森の中にあることが北海道らしい。工夫次第では、札幌近郊で一番の可能性を感じる。
- ・ 昼食を魅力にできるかが大事。宿泊施設があると良い。
- ・ 古民家を活用したカフェということでは、大手チェーンも興味を持っている。
- ・ 施設そのものの改修にはお金がかかるので、調理はキッチンカーなどで対応も。
- ・ 建物が元々有する機能により活用ができればおもしろいと思う。
- ・ 全体的に段差やスロープなどのサインが足りていないところがある。車いすで見られる施設は案内看板やパンフレットで表示してもらえるとよい。
- ・ 車いすが入れない施設は、入口などに内部がわかる写真など資料ファイルがあると想像できてよい。
- ・ 指定管理の仕様書の内容自体をプロポーザルで募集している例がある。
- ・ 修繕費をクラウドファンディングで調達するには、建物一つ一つのストーリーを踏まえたイベントとセットにしたコンテンツをつくる必要がある。
- ・ 日本の家屋は、日常的に破損が見えたときに少しずつ直す方がよい。多能工が常駐し、修繕管理することがベスト。また、修理作業をワークショップとして見てもらうことも。
- ・ 建造物の維持・修繕のための技術者、原材料の地産地消が理想。
- ・ 施設によっては、屋根に鉄板を敷いた上に桎をかけることで耐久性の向上が図られる。

- ・観光に活用する施設は、断熱や気密性の技術を入れないと活用は難しい。
- ・大工の技術研修の場として活用することで、技術の継承も図れる。
- ・ヘリテージマネージャーの研修時期の宿泊代が高く、開拓の村内に宿泊できる施設があればと思う。
- ・施設ごとに自由研究の題材になるコンテンツを持つと、夏休みの親子づれの入場が増えると思う。

【北海道百年記念塔に対するご意見】

- ・昔はどこからでもよく見えたが、最近は見えなくなった。とはいえ、地域のシンボルとしてできれば残してほしい。
- ・時間の経過でますます価値が高まるという視点もある。一方で多文化共生の立場から解体することもありかと思う。
- ・百年記念塔の解体材でモニュメントを作成。スパンは長いが鉄も土に帰る、縄文、アイヌ文化にもつながる考え方。
- ・これ以上の腐食進行を抑制するためには、雨水の浸入を抑制するための対策や排水の工夫等の補修対応が必要と考えられる。
- ・耐震性、耐風性の担保など安全性が第一である。錆片など飛散物もあることから、現状を維持しようとして周囲に立入禁止エリアをつくっても、上部の鉄板が落ちるようなことがあれば安全とはいえないのではないか。

○ 出前講座

1 開催状況

- ・北海道大学法学部演習Ⅱ（地方自治論）

日 時：平成30年5月9日（水）17時～19時

出席者：ゼミ生18名

- ・札幌学院大学経営学部専門ゼミ

日 時：平成30年5月23日（水）13時～15時30分

出席者：ゼミ生15名

2 北海道百年記念塔に対する主な意見

- ・北海道開拓の歴史を伝える存在として必要と思います。
- ・地元の人たち、観光客が集まる場所のシンボルマークとして保存すべきだと思う。
- ・シンボルとして残すことを考えた場合、費用に見合うだけの知名度があるか怪しく、今後の維持費のことを考えると解体も仕方ないように思える。
- ・道民の意見を聞いた上で検討するのがいいと思います。道民の多数が残さなくても良いと思うなら残す必要はないと思います。
- ・道外出身の私にとって、北海道の自然や景色それ自体が誇りです。
- ・百年記念施設は知名度がないので、G o P r o やドローンなどでP R 動画を作成し、YOUTUBE で紹介。
- ・百年記念塔で祭りを開催、博物館から百年記念塔の間に出店をおき、賑わいをつくる。
- ・これからも修繕費がかかり続けるなら、解体したほうがよい。

○ 住民等を対象としたアンケート調査

- ・施設利用者に対するアンケート（結果はP 31、図 1 参照）
期間：平成 30 年 4 ～ 6 月 調査数：大人 155 名 小中学生 40 名
- ・社会人及び大学生に対するアンケート（結果はP 31、図 2 参照）
期間：平成 30 年 4 ～ 6 月 調査数：社会人 515 名、大学生 175 名

○ 道民ワークショップ参加者からのご意見の概要

1 北海道博物館について

①価値や魅力

- 北海道の長い歴史をわかりやすく学ぶことができる、先人たちの苦労がよくわかる
- 貴重な資料が豊富に収蔵されている
- 案内、展示、見せ方、構成、説明内容が子どもにとっても非常にわかりやすい
- 北海道の人でも気付きがある、新しい発見がある
- 建築物、建築空間が魅力的で価値が高い
- 北海道を好きになるきっかけになる

等

②価値や魅力を多くの人に体感してもらう取組み

- 地域への出前講座、出張博物館、展示の貸出など地域とのつながりを強化する
- 個人運営の資料館や他の博物館等施設、学校、研究機関と連携した取組みを進める、
- お土産を充実させる、飲食・物販を充実させる、ここでしか手に入らないものを開発する
- アイヌ文化の発信に力を入れる、歴史の負の部分をもっと語る
- 訪れたあとにさらに学びたい展示や情報提供の工夫
- 博物館ツアー、講座の充実、周辺施設の魅力も発信、北海道と本州や海外とのつながりを伝えるなど、魅力を伝える情報発信の工夫
- 維持費の確保

等

2 北海道開拓の村について

①価値や魅力

- 当時の街並み、文化、暮らし、道具、産業を体感でき、歴史に興味を持つきっかけになる
- 個々の歴史的建造物が魅力的である、貴重な文化財としてしっかり保存されている
- 外国人、本州から来た人、研究者などに北海道のことを伝えられる場となっている
- 昔にタイムスリップした別世界、テーマパーク、アトラクション的な楽しさがある
- ボランティアの皆さんによる運営がよい
- 昔の思い出がつまっている。地域に愛情を持つきっかけになる

等

②価値や魅力を多くの人に体感してもらう取組み

- 宿泊して昔の暮らしを体験できるようにするなど、柔軟な運営を行う
- 昔の食事や祭りの再現、昔の衣装の貸し出し、写真撮影サービス、各建物における物販、職人の技術研修、歩くスキー大会、親子クイズ大会、特別展示の充実、イベントのシリーズ化・定例化、動物とのふれあい、ナイター営業など体験コンテンツや来たいと思える動機付けを充実させる
- 飲食、遊び、他施設の利用など、他の目的で訪れる人の利用者を増やす
- 歴史的建造物のさらなる受け入れ、建物の維持管理の充実、技術継承や歴史研究の場としての活用など、文化の継承拠点としてさらに力を入れる
- 積極的な活用ができる管理団体・方法の検討
- 維持管理に必要なお金をかけ文化を継承する

等

3 北海道百年記念塔について

①価値や魅力

- どこからでも見える、遠くからでも見える、帰ってきたと思えるシンボル、ランドマーク、モニュメント、生活風景の一部
- 過去への敬意の象徴である、作った人の熱意を感じる
- 形としてきれい、かっこいい素材感や色彩
- 広場が広々としている
- 記念塔の目的は時代とともに変化する、色々な立場での思い・意見がある 等

②価値や魅力を多くの人に体感してもらう取組み

- 残したい、登れるようにしたい、残す方法を考える（広場を活用してお祭りや家族で楽しめるイベント、コンサート、塔のファンを増やす工夫でさまざまな世代が親しめるようにし観光や経済に役立てる、アイヌ民族の方の思いもふまえる、クラウドファンディング等で寄付を集める、施設の有料化、施設周りの広場での収益事業等）
- 解体した方がよい（危険性が高い、費用・税負担が高い、アイヌ文化に対する再認識の必要性、開拓以降の歴史だけにこだわると北海道のイメージが悪化する等）
- 除却となった場合、その価値を継承するための代替策を考える（ミニ記念塔、同じ高さの展望台、建て替え、AR・VR 記念塔、ビジターセンターの設置等）

4 野幌森林公園や周辺施設について

①価値や魅力

- 原生林の豊かな緑、地域固有の動植物が魅力的である
- 都会の近くにある大自然として貴重である、自然と文化が一体となっている
- 散策、イベントや観察会の開催など遊び場、教育の場として活用されている
- アイヌ文化の歴史観、自然観を感じられる
- 多様な施設が集中している
- 外国人なども訪れる観光資源 等

②価値や魅力を多くの人に体感してもらう取組み

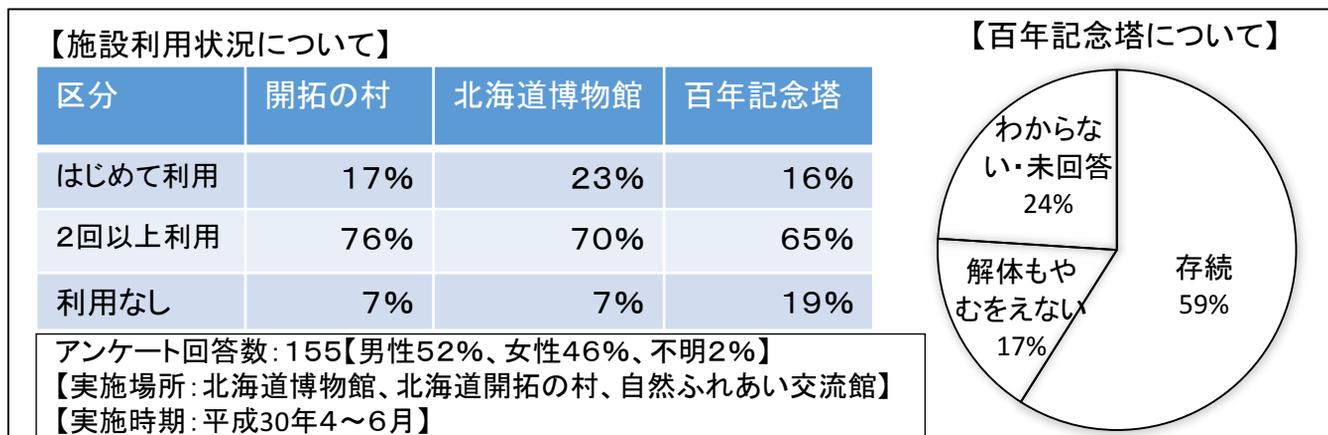
- 都市近郊の自然、動物、生き物を観察できることを情報発信する
- ネイチャーガイドのさらなる周知と活用、養成と体験プログラムづくり
- 自然体験だけでなく、アスレチック、ボルダリング、花を楽しむ場、音楽フェスなど公園に訪れるきっかけをつくる
- だれにとっても歩きやすい散策路づくりを進める 等

5 エリア全体で連携した取組み等

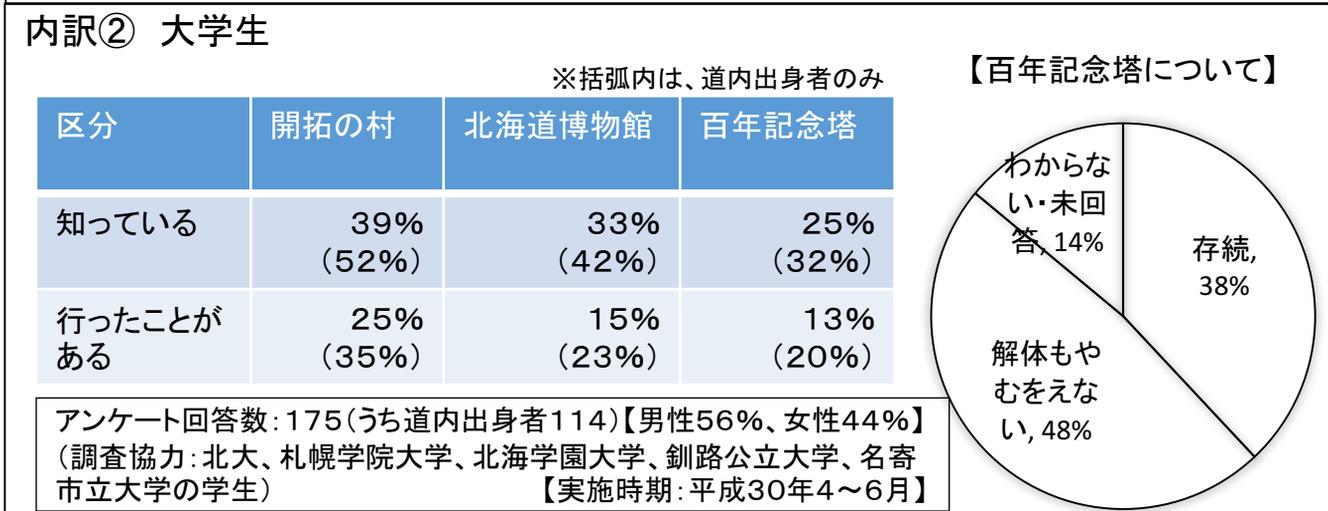
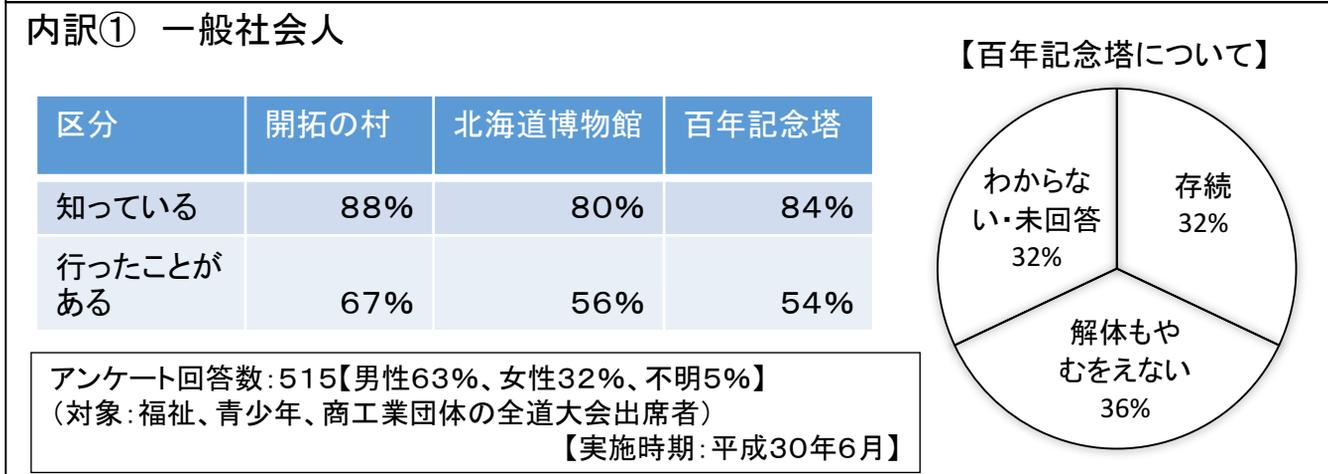
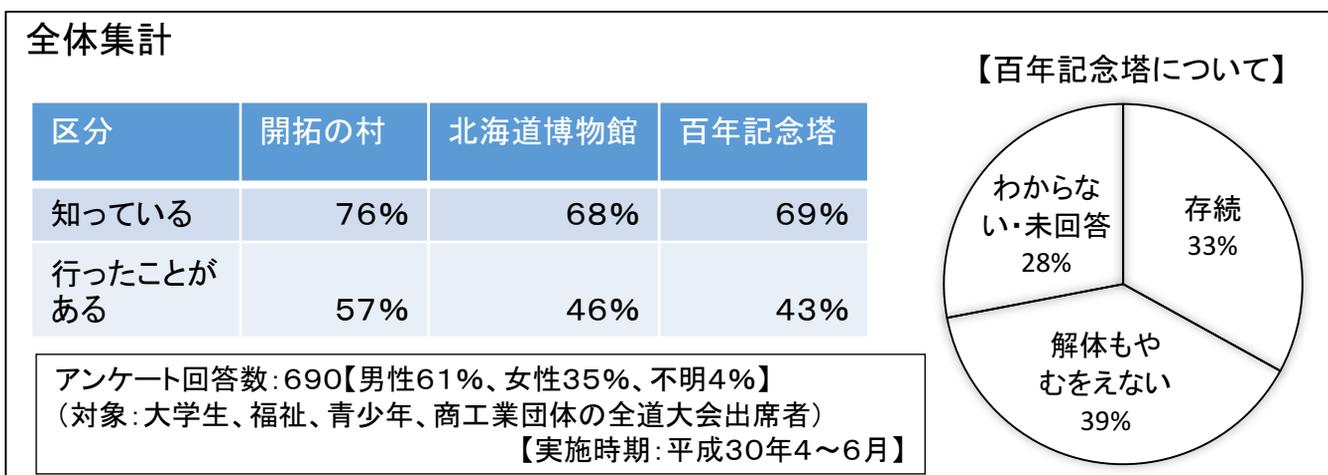
- 施設単体で紹介するのではなく、全体のわかりやすいストーリーを組み立ててPRする
⇒博物館で全体を、開拓の村で直近 100 年ほどの歴史を、森林公園で自然を知ることができ、全体がつながっている。50 年単位での変化を記念するモニュメントをつくる、全体のパンフレットづくり等

- 魅力の伝え方、使い方を工夫して、まず来てもらいリピーターになってもらう
 - ⇒自然を四季折々で楽しめる、「ここに来ると1日楽しめる」ことをPRする、1日モデルコース、教育機関との連携強化、修学旅行や宿泊研修での活用促進、昔 UFO が見えたなど都市伝説をつくる、札幌中心地から近いことをもっと全国・国外にアピール、熊もいなくて夜の森も安全、120 万年前からの歴史のある大自然、写真映えするスポットの宣伝、デートスポット宣伝等
- 相手に届く情報発信の手法を工夫する
 - ⇒今ある資料を最大限に活用、大学生参加のパンフレット作成、テレビ・ラジオ・パソコンによるわかりやすいコマーシャル制作・発信、SNS 活用、動画制作、ドラマ・マンガ・小説などを活用、小中学生体験学習の副読本を作成等
- 民間企業や施設と連携した広報・企画戦略を強化する
 - ⇒ホテル、旅行会社、JR、バス、商店街、飲食店などとの連携、円山動物園と連動、周囲のゲストハウスとコラボした集客、パッケージツアーの実施、ロケ地活用等
- アクセス性や回遊性の向上を図る
 - ⇒都市部からの直通バス、12 号線入口のサインを見やすくする、JR 大麻駅や新札幌駅からのバス増便、無料循環バス、セグウェイ活用、レンタサイクル、サインや動線など施設全体で連動させる等
- 様々な世代が来たいと思える「個性」「楽しみごと」「コンテンツ」を増やす
 - ⇒家族連れでピクニックやキャンプができる空間づくり、マラソン・サイクリング、歩くスキーのコースづくり、冬の遊び体験、ここでしか手に入らないものの開発、花火大会、マラソン大会のコース設定、自然の美しい景色とセットとなった美味しいレストラン、目玉になる野外コンサート、スタンプラリー、縄文文化をうけてアーティスト・音楽・自然・歴史の融合の場づくり、研究者が集まる場に、エゾシカ料理など北海道の「食」にふれる機会づくり、縄文太鼓の音楽会、地域密着のイベント、自転車のイベント、運動会の会場にする、フリーマーケットやマルシェを行う、グランピングができるようにする等
- 入場券配布や料金設定の工夫をする
 - ⇒共通券や割引券の発行と積極的配布、家族で利用しやすい料金設定、入場料無料デーを年に何回か設ける、割引クーポンや〇〇パスの強化等
- 継承や活用費用の自立的な捻出方策を工夫する
 - ⇒民間との連携、寄付、クラウドファンディング、イベント参加費、入場料収入等
- 継承や活用を住民参加や官民連携で検討・連携できる場や組織をつくる
 - ⇒周辺施設や各施設の情報共有の連絡会議、札幌市厚別区や江別市と連携等

■ 施設利用者に対するアンケート結果について(図1)



■ 社会人及び大学生に対するアンケート結果について(図2)



施設の概要

I 北海道博物館の概要

1 主な沿革

- 昭和 39 年 (1964) 開道百年記念事業協議会で開拓記念館の設置を決定
- 昭和 43 年 (1968) 「開拓記念館資料収集基本方針」を決定
北海道開拓記念館起工式
- 昭和 46 年 (1971) 開館
- 平成 3 年 (1991) 常設展示全面改訂
- 平成 13 年 (2001) 赤れんが庁舎内に「北海道の歴史ギャラリー」オープン
- 平成 27 年 (2015) 北海道博物館リニューアルオープン
北海道開拓記念館と道立アイヌ民族文化研究センターとの統合

2 設置目的

北海道の自然、歴史、文化に関する資料を収集保存、調査研究し、それらを体系的に整えたとともに、総合展示を核とする展示活動や教育普及活動事業を通して、北海道の自然・歴史・文化に関わる遺産を後世に伝える役割を果たしている。

3 コンセプト

- 北海道を代表する「総合博物館」
- 道民とともに歩み、愛される「道民参画型博物館」
- 北海道の「中核的博物館」

4 組織・施設の概要等

(1) 職員数 (平成 30 年 4 月 1 日現在)

区分	正職員	非常勤、臨時職員	計	備考
道職員	36 人	18 人	54 人	学芸員・研究職員 計 30 人
指定管理者	2 人	5 人	7 人	
計	38 人	23 人	61 人	

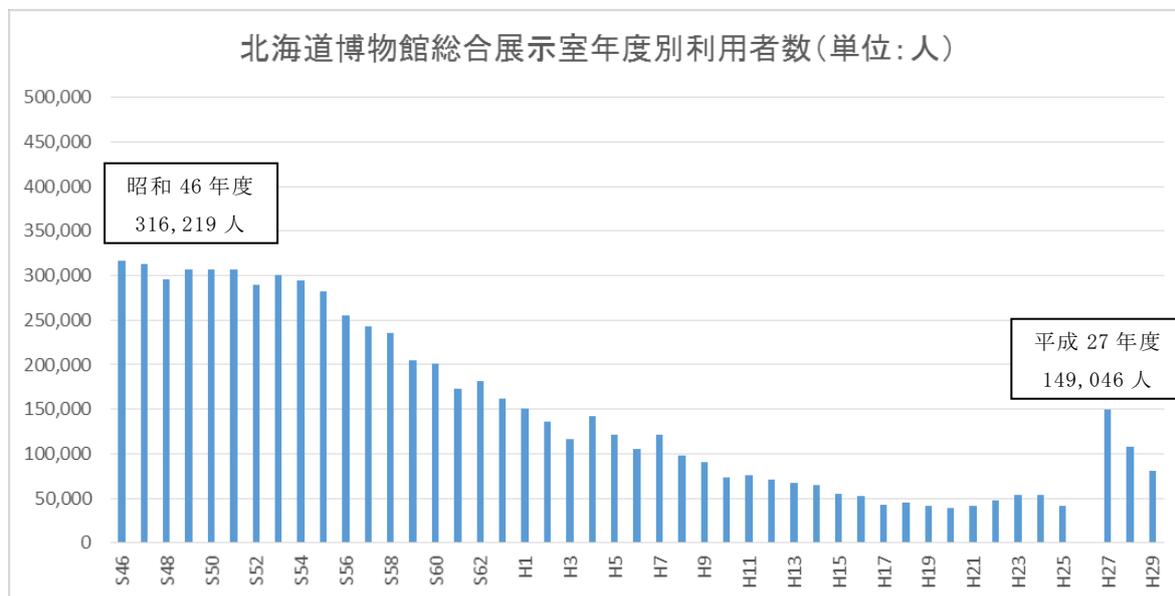
(2) 収蔵資料数 183,180 件 (平成 30 年 3 月末現在)

(3) 構造 RC (一部 SRC) 造り 地上 2 階、地下 2 階

(4) 延床面積 12,947 m²

(5) 館内施設 総合展示室、特別展示室、はっけん広場、図書室、記念ホール、講堂、休憩ラウンジ、ミュージアム・カフェ等

5 入館者の状況



II 北海道開拓の村の概要

1 主な沿革

昭和 42 年 (1967)	開拓記念建造物等の移設による野外博物館構想が決定
昭和 46 年 (1971)	道立野幌森林公園の公園計画に野外博物館の設置を告示
昭和 47 年 (1972)	北海道開拓の村建設基本構想の策定
昭和 48 年 (1973)	移設建造物等資料収集方針の決定
昭和 52 年 (1977)	開拓の村建設工事起工式
昭和 58 年 (1983)	開拓の村オープン

2 設置目的

社会・経済の急速な発展に伴って失われていく、開拓当時の大切な建造物や人々の生活を復元し、保存し、開拓過程における生活文化に対する認識を深める。

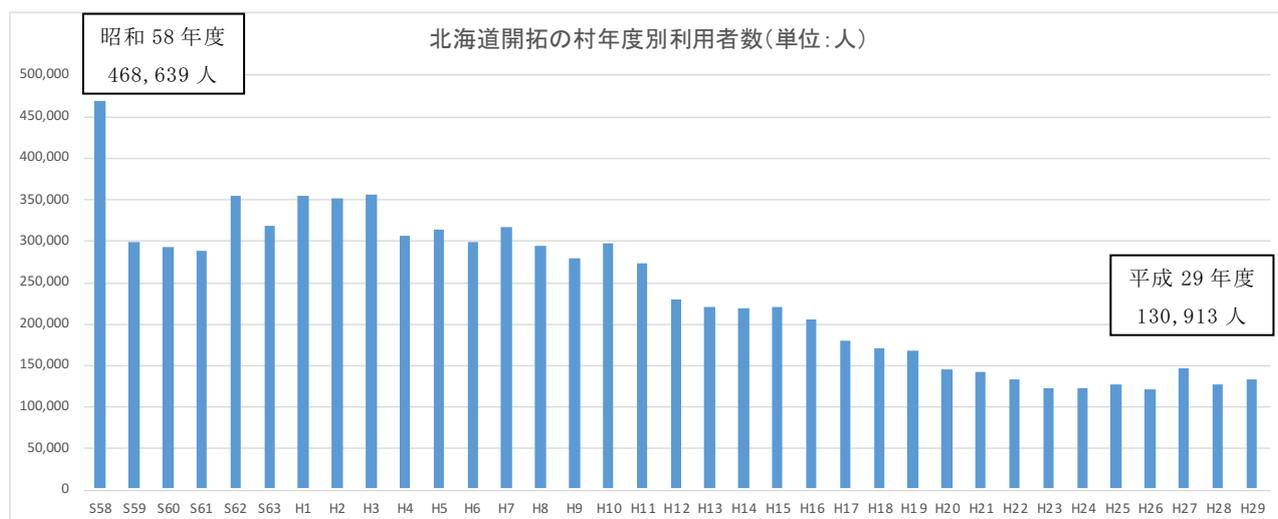
3 コンセプト

北海道開拓の歴史を示す建造物等を保存し、展示する。
 北海道の開拓過程における生活様式、年中行事等に係る催しを行う。
 開拓の村の展示物に関する案内書、解説書等を作成し、配付する。

4 施設の概要等

区分	復元施設	再現施設	修景施設	計
市街地群	25 棟	4 棟	2 棟	31 棟
漁村群	2 棟	-	2 棟	4 棟
農村群	8 棟	1 棟	5 棟	14 棟
山村群	-	1 棟	2 棟	3 棟
計	35 棟	6 棟	11 棟	52 棟
その他	体験学習棟 1 棟、食堂 1 棟、吊り橋 1			
敷地面積	54.2ha			

5 入村者の状況



Ⅲ 北海道百年記念塔の概要

1 主な沿革

- 昭和 41 年（1966） 北海道百年記念事業実施方針において記念塔建設を決定
- 昭和 43 年（1968） 建設工事の着工
- 昭和 45 年（1970） 完成
- 昭和 46 年（1971） 一般公開

2 設置目的

本道の発展につくした有名無名のすべての先人に対する感謝の心と北海道の輝く未来を創造する決意と躍進北海道の姿を力強く象徴するものとして、高さも量感においても雄大な記念塔を建設する。

3 コンセプト

道民がみんなで築く躍進北海道のシンボル（象徴）
 道民の巨大なエネルギーを結集し、天をついて限りなく伸びる発展の勢いを表す
 高さは北海道百年にちなみ 100 メートル

4 施設の概要等

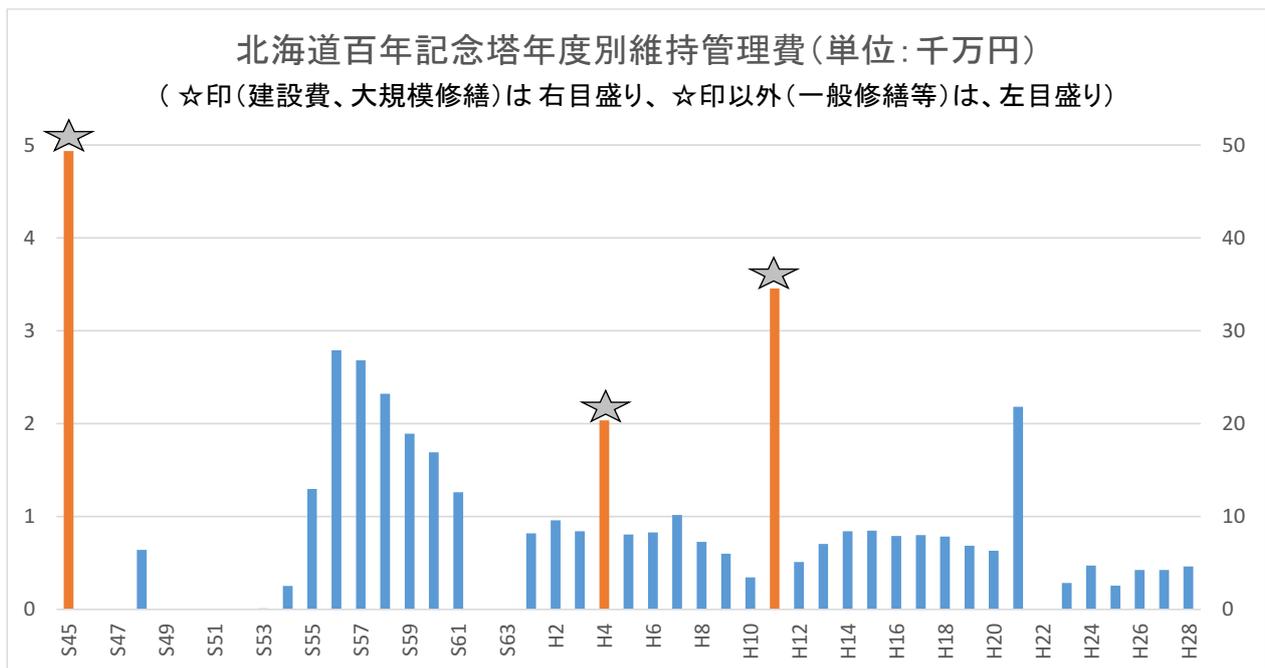
- (1) 構造 鉄骨トラス構造 地上 25 階建て
- (2) 外装材 無塗装耐候性高張力鋼板
- (3) 高さ 100m
- (4) 総工費 約 5 億円（半分は道民等からの寄附）
- (5) 設計 井口 健 氏（今金町出身／(株)久米建築事務所札幌支社）
- (6) 施工 伊藤組土建株式会社
- (7) 壁面レリーフ 「開拓」（佐藤忠良氏）
 （北海道庁玄関ホール壁面レリーフ原型）

5 保守管理の状況

(1) 維持管理経費等（S45 ～ H28）

建設費	補修費	その他（保守計画策定）	合計	備考
493,680 千円	862,035 千円	14,934 千円	1,370,649 千円	現在の貨幣価値に換算すると約 25 億円程度 （消費者物価指数を基にした概算）

※上記には、エレベーターの保守点検、電気代等の費用は含まれない。



6 現状の状況

建設から50年近くが経過し、錆片が落下するなど劣化が進んでおり、平成26年7月から立入禁止としている。

今後も維持していくためには、多額の費用負担が見込まれる。

○ 今後50年間の維持管理経費等（税抜、耐震化経費含まず）

- ① 展望室への立入を可能とする場合 約28.6億円
- ② モニュメントとして維持する場合 約26.5億円
- ③ 解体する場合 約4.1億円

※ ①、②いずれの場合も周辺の立入禁止措置が必要。

7 安全性の検討

(1) 平成29年実施の調査結果

ただちに倒壊する危険性はないものの、塔内の展望室に立ち入りできるように原状復帰した場合においても、今後、部材の腐食等による不測の落下事故を完全に防ぐことは、物理的にも不可能に近いことから、その対策として、立入禁止エリアの設定（フェンスの設置）、落下事故防止用屋根付きの通路が必要。

(2) 専門家ヒアリングでのご意見

耐震性、耐風性の担保など安全性が第一である。錆片など飛散物もあることから、現状を維持しようとして周囲に立入禁止エリアをつくっても、上部の鉄板が落ちることがあれば、安全とはいえないのではないかと懸念されている。

(3) 外板の素材メーカーによる調査結果（平成30年6月実施）

外板パネルの穴あき、波打ち、及び錆片の落下が確認される。これらは、主に雨水の塔内部への浸入と雨水が溜まりやすい構造に起因した腐食によるものと推定。これ以上の腐食進行を抑制するためには、雨水の浸入を抑制するための対策や排水の工夫等の補修対応が必要と考えられる。

(4) 補修工事の可能性

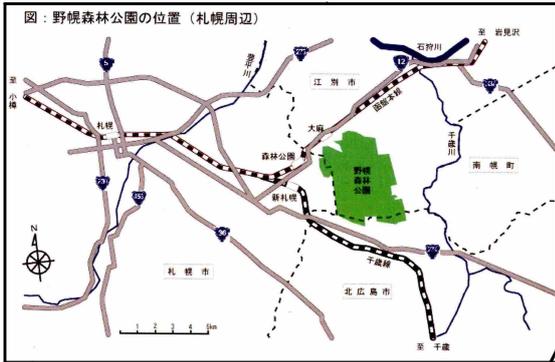
構造上、雨水の浸入を完全に防ぐことや、これ以上の排水対策は困難



百年記念塔の劣化の状況



野幌森林公園の周辺施設



道立図書館
(道教育委員会所管)



道立野幌総合運動公園
(道建設部所管)

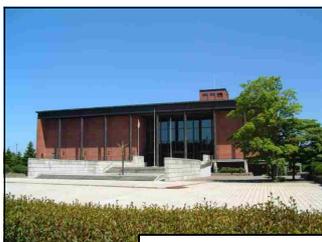


道立埋蔵文化財センター
(道教育委員会所管)



北海道百年記念塔
(道環境生活部所管)

野幌森林公園自然ふれあい交流館
(道環境生活部所管)



北海道博物館
(道環境生活部所管)

北海道開拓の村
(道環境生活部所管)



—— 集団施設地区（記念施設地区）

—— 森林地区

【オーナー制度】

消費者が生産者に事前に出資し、生産物を受け取る仕組みで農産物の他、畜産物や魚介類・鮭・森林などを対象としたものがある。日光杉並木オーナー制度では、杉並木保護に賛同された場合、並木杉1本につき1千万円でオーナーになっていただき、その代金を日光杉並木街道保護基金で運用し、その運用益で保護事業を行う。

【クラウドファンディング】

個人や企業、その他の団体などが、インターネットを介して、寄附、購入、投資などの形態で、不特定多数の支援者から、少額の資金を調達する仕組み。群衆を意味する「crowd」と、資金調達を意味する「funding」を組み合わせた造語。

【国立アイヌ民族博物館】

2020年4月、白老町に国が開設するアイヌ民族の文化復興拠点「民族共生象徴空間」の中核施設としてオープン予定。

【古民家再生】

古民家とは、日本の住居のうち建築年数がかなり経過した民家のことで具体的かつ明確な定義は存在しないが、文化財としても価値のある古民家は近年リノベーションによって再利用されるケースが増加。

【指定管理者制度】

公の施設の管理者について、「地方公共団体が出資している法人、公共団体、公共的団体」といった条件が撤廃され、地方公共団体の指定するもの（指定管理者）が管理を代行する制度。

【指定寄付】

国宝・重要文化財（建造物、美術品）など国指定文化財を修理する場合に、文化財の所有者が広く一般から寄付を集め、修理費の一部に充てるとき財務大臣の指定を受けると、寄付した法人・個人が税制上の優遇措置を受けられる制度。

【縄文遺跡群】

北海道・北東北の縄文遺跡群は、津軽海峡を挟んだ日本列島の北海道・北東北に位置し、縄文時代の各時期（草創期、早期、前期、中期、後期、晩期）における、人々の生活あとの実態を示す遺跡（集落跡、貝塚、低湿地遺跡）や、祭祀や精神的活動の実態を示す記念物（環状列石、周堤墓）で構成された17遺跡からなる考古学的遺跡群。2018年7月19日に2018年度の世界文化遺産推薦候補に選定。

【地産地再】

本構想における造語。「地産（道内）＝地元（道内）の材料」で「地再＝地元（道内）の技術者が再生」することにより、域内循環にも貢献することをめざす。現在、開拓の村の展示建造物は、主に道外の材料や技術者により修繕されており、修繕費が高くなる一因になっている。道内の材料や技術者により、開拓の村の展示建造物を修繕することで、修繕費用の節約に繋げるほか、将来的には、この取組を同じく歴史建造物の維持費捻出に苦慮する道内自治体等のモデルとする。

【中核的博物館】

北海道博物館は北海道博物館基本計画において道内の中核的博物館として、地域の博物館とのネットワークのもとに連携、協力関係を強固なものとし、道内博物館全体の水準の向上や活力の強化をとおして、地域の活性化につなげることをめざす。

【中期目標・計画】

北海道博物館基本運営方針に基づき、北海道博物館が社会的使命を果たすため、基本方針を踏まえ、資料の収集保存、展示、教育普及、調査研究などの博物館活動の実施に関する中期的な目標・計画を策定。現在、第1期目標・計画（平成27年度～平成31年度）を推進中。

【道民参加型博物館】

博物館の様々な活動に、道民が利用者としてだけでなく、協働者、ときには発信者として多面的に参画する機会を創出することによって、博物館活動をより豊かにし、道民と連携、協働する博物館づくりを推進。

【ネーミングライツ】

スポーツ施設や文化ホールなどの施設の名称に、スポンサー企業の社名や商品ブランド名を付与する権利。「命名権」あるいは「施設命名権」とも呼ばれる。

【野幌森林公園自然ふれあい交流館】

2001（平成13）年にオープンした道立自然公園野幌森林公園のビジターセンター。館内では、公園の自然のつながりをジオラマやイラスト・写真などでわかりやすく紹介。

【はっけん広場】

北海道博物館内にあるこどもからおとなまで楽しみながら「じっくり観察する」「ホンモノにふれる」「道具を使う」「何かをつくる」などの体験ができる施設。

【ヘリテージマネージャー（地域歴史文化遺産保全活用推進員）】

地域に眠る歴史文化遺産を発見し、保存し活用して、地域づくりに活かす能力を持った人材。

【北海道ミュージアム構想】

道では、北海道博物館を核として、本道固有の歴史や道内各地の様々な文化を発掘・再発見し、発信継承する空間として「北海道ミュージアム構想」を推進。

【北海道立総合博物館協議会】

北海道立総合博物館条例に基づき、北海道立総合博物館の事業を円滑かつ適正に行うため、知事の附属機関として、「北海道立総合博物館協議会」及び「アイヌ民族文化研究センター専門部会」を設置。

【北海道立図書館】

1926（大正15）年、札幌市に「行啓記念北海道庁立図書館」として開館。昭和26年に図書館条例に基づき北海道図書館と改称、1967（昭和42）年に江別市に移転。

【北海道立野幌総合運動公園】

総面積64.1haもの広大な園内に、プールを含むアリーナをはじめ、各種運動施設が設置されている、道民の大規模なスポーツレクリエーションの拠点。

【北海道立埋蔵文化財センター】

北海道内の埋蔵文化財の発掘調査を行うとともに、文化財の保護及び活用を図るために必要な事業を行い、もって本道文化の向上に寄与。1999（平成11）年設置。

【北海道立文書館】

北海道の歴史に関する文書や記録などを収集し、保存するとともに、これらの資料を利用しただけのための施設として1985（昭和60）年に設置。

【PPP（パブリック・プライベート・パートナーシップ）】

公共施設等の設計、建設、維持管理、運営等を行政と民間が連携して行うことにより、民間の創意工夫等を活用し、財政資金の効率的使用や行政の効率化等を図るもの。

【PFI（プライベート・ファイナンス・イニシアティブ）】

民間の資金や経営能力・技術力（ノウハウ）を活用し、公共施設等の建設・改修・更新や維持管理・運営を行う公共事業の手法であり、PPPの一類型。

